論　文

観光の文化人類学—グァテマラの事例—

佐　藤　孝　裕

Anthropology of Tourism : A Case of Guatemala

Takahiro SATO

1．はじめに

昨年2000年の5月1日，多くの日本人が国内外に旅行へと出かけるゴールデン・ウィークの最中に，邦人観光客が中米のグァテマラで殺傷されるという痛ましい知らせが飛び込んできた。事件に関わったのは現地の先住民と伝えられたため，マヤ地域をフィールドにし，事件が起きた町の近くも訪れたことがあり，マヤ人の暮らし振りをつぶさに見てきた筆者にとっては信じられない思いであった。新聞記事の多くは，事件の経緯を報じるとともに，「秘境」イメージに釣られて安易にこの種のツアーに参加することに対して警鐘を鳴らしていた[注1]。一体この事件の背後には何があるのだろうか。本論考では，観光を文化人類学の研究対象として考える意味を論じると共に，このグァテマラの邦人殺害事件が内包する問題について検討したい。

2．観光の文化人類学的研究

文化人類学には，宗教人類学，経済人類学，言語人類学，認識人類学など様々な分野があるが，その中でも観光人類学は最も新しい分野に属する。観光が人類学の研究対象として位置付けられるようになったのは，1974年にメキシコ・シティで開かれたアメリカ人類学会のシン

[注1]そもそも「秘境」という言葉の使い方自体が安直であろう。『広辞苑第五版』によると，秘境とは「人跡のまれな，様子がよく知られていない土地」である。後でも述べるが，この事件の起こったトドス・サントス・クチュマタンは，人口約22,000人，外国人のためのスペイン語の学校があり，県都ウェウェテナンゴにも一日数便の定期バスの往来がある町である。これが果たして「秘境」であろうか。単に人を引きつけるための宣伝文句として秘境という語を使っているだけだとしても，その背後に，都市住民の田舎に対する優越，更に言えば「文明」の側の「野蛮」に対する優越といった意識が，秘境への憧れの裏返しにあるのではなかろうか。加えて，近代文明に侵されず，自然に抱かれているという秘境へのイメージへの羨望のまなざしの裏側には，物質的生活に恵まれた者の経済的優越感が潜んでいるのではなかろうか。ヌーネッツが指摘するように，ほとんどの観光客は「持てる者」であり，対して観光客を迎える側の国や人々は「持たざる者」なのである。(ゼロン・ヌーネッツ「人類学から展望する観光活動の研究」，バレーン・L・スミス編『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応研究—』勁草書房，1991，p.379) しかも，グァテマラのように観光が国内において重要な産業になっている国には，かつて植民地支配を受けていた例が少なくない。(橋本和也『観光人類学の戦略　文化の売り方・売られ方』世界思想社，1999，pp.112-3) この場合，かつては政治的支配・非支配関係だったのが，観光におけるゲストとホストという形で経済的支配・非支配関係という新たな一種の主従関係が生まれているとも考えられる。

ポジウムがきっかけであった[1]。それまで人類学者は，「観光＝遊び，観光客＝暇で遊びに来ている人」というレッテルを嫌ってか，観光を研究領域に入れるのを避け，また調査地において観光客と同一視されることを忌避してきた。[注2] ヌーネッツの言葉を借りて言えば，観光の研究は「正当なる（proper）研究テーマ」だとか，「伝統的な学問の範囲内のもの」とはみなされなかったというわけである[2]。筆者自身，観光地化している自分の調査地に行き，大勢の観光客の中にいると，「自分は観光しているのではなく，調査・研究しているのだ。一緒にして欲しくない」と感じたことが一再ならずある。

もう一つには，文化人類学という学問自体の性格にも関わっているだろう。広義の人類学の研究は，ヨーロッパ人がヨーロッパ以外の世界に進出し始めた15世紀末以来の大航海時代に端を発し，19世紀になって学問として体系づけられ始めた。その原点には，ヨーロッパ人とは異なった身体的特徴や風俗習慣を持つ人々への関心があり，彼らの文化や社会がどのようなものであるかを研究しようとしたのである。その研究対象の社会のほとんどが近代化していない，換言すれば伝統的文化を保持している人々から成るものであった。従って，人類学者がもっぱら関心を持って追究してきたのは，当該社会に残されている伝統的な部分だったのである。

それに対して，観光とは極めて近代的な現象である。勿論，人は古くから旅をしてきた。ハリカルナッソスのヘロドトスHerodotosの『歴史』やモロッコのイブン・バットゥタIbn Battutahの旅行記『都会の珍奇さと旅路の異聞に興味を持つ人々への贈物』，ヴェネツィアのマルコ・ポーロMarco Poloの『世界の記述』などはその優れた所産であろう。また，聖地への巡礼という旅行も世界の各地で行われてきている。キリスト教徒にとってのスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラSantiago de Compostela[3]やフランスのルルドLourdes[4]，イスラーム教徒にとってのメッカMeccaなどがその代表的なものとして挙げられよう。日本においても，四国八十八ヵ所巡りは中世後期以来次第に盛んになり，今日なお多くの信者を集めている。しかし，前者の旅行家による大がかりな旅行にしても，後者の宗教上の目的の巡礼にしても，いずれも何らかの苦痛を伴うものであり，何人でも気軽に参加でき，娯楽的な要素が濃い観光とは一線を画している[注3]実際，旅行を意味する英語travelの語源はtravail「骨折り」であり，本来旅をするということは苦痛を伴うものと認識されていたようである。それが娯楽を追求する現代的な観光へと転換したのは，19世紀後半以降の産業革命の結果としての生活の変化と交通の発達によるところが大きい[5]。このように近代の所産である観光に，伝統を追求しようとする文化人類学者が目を向けなかったのも無理からぬことであった。

日本で観光が文化人類学の研究対象になったのはもっと遅かった。1987年に「待望の本格的エンサイクロペディア」の歌い文句付きで発売された斯界の最大規模の事典である『文化人類学事典』[6]には，観光人類学の項目がないどころか，索引に観光の語すら入っていない。観光人類学の観点に立った民族誌が書かれたのも，1988年の山下晋司の『儀礼の政治学―インドネシア・トラジャの動態的民族誌―』をもって嚆矢とする。その後，国立民族学博物館の石森秀三を中心として，1988年から1994年までの６年間に，「旅と観光に関する民族学的研究」「観光の総合的研究」が組織され，日本

注2 職業としての観光業自体、観光が本来の文脈から離れたものという特徴を持つために、本来の仕事でないと蔑まれることが多い。（橋本和也『観光人類学の戦略　文化の売り方・売られ方』世界思想社、1999、p.159。）

注3 中には，四国八十八ヵ所巡りに見られるように，本来願を立てた個人が歩いて寺院を参拝して回っていたのが，団体で出かけてバスを利用するようになったり，挙句の果てには小型飛行機をチャーターして空から回るだけで済ましてしまうような人も出て，観光と区別がつかなくなりつつあるものもある。

においても観光人類学の研究が発展する端緒となった[7]。殊に，前者のプロジェクトに関しては，その成果が1991年の日本民族学会で，「民族文化の現在―観光人類学の可能性」と題したシンポジウムの中で発表され，観光人類学の名が広まる大きな契機となった[8]。

こうして，今では観光が文化人類学の重要なテーマの一つと考える方が当然と考えられるようになっている。それは，観光客が定型的で物見遊山的でお手軽なツアーに参加するのみならず，かつては人類学者でなければ行かなかったような交通手段の乏しい僻地にまで足を踏み入れるようになった結果，人類学者がどこに行っても観光客の姿を見かけるようになったからであり，またレットが言うように，近代の観光活動は，人間が文化の境界を越える世界史上唯一にして最大の平和的行為だからである[9]。

また，観光へと出かける人々の数が無視し得ないほど激増してきたことも，文化人類学の立場から観光を研究対象に取り上げるようになった要因の一つに挙げられよう。19世紀の後半以降大衆化し始めた観光活動は，第二次世界大戦後は世界的に広まっていく。殊にここ10～20年の増加には目覚ましいものがある。具体的に述べると，外国を旅行する人の数は，1995年に世界全体で年間５億人を超え，今年は７億5,000万人を超えると予測されている[10]。現在の地球の人口が約60億であるから，毎年９人に１人が外国旅行をしていることになるのである。

日本に目を転じても，海外へと渡航する人の数は，1990年に1,100万人と初めて1,000万人を超えた[11]。翌年1,066万人と若干減少したものの[12]，その後は順調に増加し続け，1997年には1,680万人に達している[13]。僅か７年で1.7倍にもふくれあがっているのである。もっとも，その翌年は長引く景気の低迷などのため８年振りに減少に転じ，前年比5.9%減の581万人になったが[14]，いずれにしても戦後海外旅行が解禁された1964年の渡航者の数が13万人だったことを思うと，隔世の感がある[15]。

しかも観光は，それがどんなに近接した地域で行われたにしても，多少なりともその地には自分とは異なる風俗習慣があるはずであり，そういったものに接することが旅の醍醐味の一つになっている。異国への観光の場合は尚更である。すなわち観光は，それがたとえいわゆるパック・ツアーに参加するものであるにしても，その経験を通じて自分達とは異なる文化に接することによって自らの価値観や世界観を相対化し，自らを改めて文化的に位置づける契機となり得るのである。

このように，観光はまさに文化人類学が研究対象にすべきものなのである。

３．グァテマラ，その国と民族

グァテマラは，メキシコの東南に位置する面積108,899㎢の共和国である[注4]。人口は1997年現在で1,124万人であり，中央アメリカ５ヵ国の中で最大である[16]。全人口の中に占めるマヤ系先住民の比率は，ラテンアメリカ諸国の中でもとりわけ高く約42%に達し[注5]，先住民と白人の混血であるいわゆるメスティソが約50%，白人が約8%と考えられている。ただし，後述するように，何をもって先住民とするかは

注4 以降グァテマラについての説明は，註がない限りラテン・アメリカ協会編，外務省中南米局監修『中南米諸国便覧』ラテン・アメリカ協会，1997，pp.759-75，による。

注5 グァテマラ国内のマヤ系先住民は500万人を超えるとされ，中でも人口が多いのがキチェQuiche，カクチケル Cakchiquel，ケクチ Kekchi，そしてマム Mamである。ちなみに現在のいわゆるマヤ民族の祖先は，およそ4000年前までは原マヤ語を話していたのだが，時の経過とともに居住地が拡大し，それに従って言語も次第に分裂し，現在では28の言語集団に分かれている。うち21の言語集団がグァテマラ国内に居住している。マム・マヤ人の数はキチェ・マヤ人に次いで多く，かつては68万6千人と言われていたが，実際にはこれより遥かに多いとみられてる。(小泉潤二「境界を分析する―グアテマラの場合」，黒田悦子編『民族の出会うかたち』朝日新聞社，1994，p.62，及び小泉潤二「マム」，綾部恒雄監修『世界民族事典』弘文堂，2000，pp.646-7。)

表1　中米諸国の先住民の人口と教育状況

（小林到広『沈黙を越えて－中米地域の先住民運動の展開－』神戸市外国語大学外国学研究所、1986、p.4、表1を基に作成）

	先住民人口(万人)	比率(%)	先住民文盲率(%) (　)内は国全体	先住民非就学率(%)
メキシコ	804	12.4	79.4(23.7)	63.0
グァテマラ	374	59.7	76.2(21.2)	75.5
エル・サルバドル	10	2.3		
コスタ・リカ	1	0.6		
パナマ	12	6.8	78.7(20.6)	74.9

定義上（自己定義及び他者定義）の問題もあって容易ではなく，表1にあるように60%近くが先住民としている統計もある。いずれにしても，中米諸国の中でも，国民全体の中に占める先住民の比率が傑出して高いことが表から見て取れる。そのため非識字率も高く，1994年現在国家識字委員会の推計によると38.8%にも達している[注6]。この識字率の格差は富の偏在とも比例しており，数%が富裕層，25～30%が中間層，65～70%が貧困層を成している[注7]。この経済的階層区分は，人種的区分にもほぼ対応する。すなわち，富裕層は白人，中間層はラディーノと呼ばれる都市に住む白人と先住民の混血[注8]，そして貧困層がマヤ系先住民というわけである。首都であるグァテマラ市を擁するグァテマラ県を始め，全国は22の県に分けられている。基幹産業は農業であり，国内総生産の25.3%，輸出総額の37.2%を占めている。しかし，グァテマラにとって現在も将来的にも大きな位置を占める有望な産業は観光である。

一般的に，観光は経済上の観点から見て極めて重要な産業である。殊に発展途上国にとっては，労働集約性が高く低熟練労働力の雇用市場として優れているということと，地域開発の有効な手段として高い評価を受けている(17)。観光客が旅行先で地元に落とすお金が地元を潤すのみならず，こうして獲得された資金が地域経済の中で循環し，観光とは無関係の産業にも間接的に利益をもたらし得るというのである。こういうわけで，観光活動は国内の資源に依存できる開発や近代化の近道の一つとも考えられているのである(18)。ましてやラテンアメリカ諸国の

注6 山崎によると，無料である小学校を卒業する生徒の数すら少なく，7歳以上の文盲率は60%以上に達するという。（山崎カヲル「グァテマラ」，大貫良夫・落合一泰・国本伊代・恒川恵市・福嶋正徳・松下洋監修『新訂増補ラテン・アメリカを知る事典』平凡社，1997，p.143。）

注7 歴史的記憶の回復プロジェクトによると，貧困層は80%にも達するという。（歴史的記憶の回復プロジェクト編『グアテマラ虐殺の記憶　真実と和解を求めて』岩波書店，2000，p.3。）

注8 ラディーノは，元々はスペイン人征服者を指す言葉だったが，現在では白人と先住民の混血であるメスティソとほぼ同じ意味で使われている。しかし，現状に即してより正確に言えば，ラディーノは人種的概念と言うより，文化的概念である。と言うのも，ラディーノの中には白人も先住民もいるからである。小泉は，ラディーノは非先住民のことであり，先住民とは非ラディーノのことである，としている。このように，ラディーノと先住民は同語反復の関係にある。換言すれば，両者とも相手の存在がなければ規定し得ない関係にあるのである。そしてこの両者には境界があり，それは越境可能である。実際，田舎に住む若い先住民が現状の生活を嫌い，都市に出てスペイン語を使って暮らす例が少なからずある。母語を捨てスペイン語を常用語とし，都市生活者となった彼は，先住民でなくラディーノであるとみなされるのである。このように先住民とラディーノとが，越境可能な境界に接した，明確さと曖昧さを兼ね備えた存在になっている背景には，自分がどのエスニック集団に属するかが自己定義になっているということがある。また，ラディーノ世界で成功し始めた先住民を，国勢調査がラディーノとして数えた例もある。（小泉潤二「境界を分析する―グアテマラの場合」，黒田悦子編『民族の出会うかたち』朝日新聞社，1994，pp.63-80。）

中でも貧しい方に入る（表２参照）発展途上国であり，国内に砂糖，コーヒー，綿花，バナナなどの果物等の農産物[注9]以外に外貨を獲得する産業の乏しいグァテマラにとって，観光がとりわけ重要な産業であることは言を俟たない。

表２　所得分配・貧困層のラテンアメリカ諸国比較

（今井圭子「ラテンアメリカの経済」、国本伊代・中川文雄編『ラテンアメリカ研究への招待』新評論、1997、p.114、及び大貫良夫・落合一秦・国本伊代・恒川恵市・福嶋正徳・松下洋監修『新訂増補ラテン・アメリカを知る事典』平凡社、1999、pp.551-5を基に作成）

国　名	1人当たりGNP（ドル）（1998年）	下位40%の低所得世帯が得る所得(%)（1981-93年）	下位20%の高所得世帯の所得／下位20%の低所得世帯の所得（倍）（1981-93年）	貧困層の人口（%）（1990年頃）＊＊	
				都　市	農　村
アルゼンチン	6,720	15.2＊	8.1＊	15	20
ウルグアイ	3,504	21.9＊	4.5＊	10	23
メキシコ	3,530	11.9	13.6	23	43
ブラジル	3,214	7.0	32.1	38	66
ベネズエラ	3,211	14.3	10.3	30	42
パナマ	2,772	8.3	29.9	36	52
コスタリカ	2,124	13.1	12.7	24	30
ペルー	2,189	14.1	10.5	52	72
コロンビア	1,749	11.2	15.5	40	45
グァテマラ	1,013	7.9	30.0	60	80
ボリビア	964	15.3	8.6		86
ホンジュラス	667	8.7	23.5	74	80

注　＊都市部、1992年。　＊＊国連開発計画の指標に基づく。

４．グァテマラおける観光の類型

グァテマラにおいては，どのような観光活動が代表的なものであろうか。その前に，そもそも観光とはいかなる活動であろうか。ブレンドンは，既知度の観点から観光（tourism），旅行（travel），探検の三者を比較・区分している。彼によると，探検が知られていないものの発見，旅行がよく知られていないものの発見であるのに対し，観光とはよく知っているものの発見である[19][注10]。

これを受けて橋本は，観光とは「異郷において，よく知られているものを，ほんの少し，一時的な楽しみとして，売買すること」であり，「一時的な楽しみ」は「本来の文脈から切り離され，集められて，新たな「観光文化」を形成するものである，としている。そして，こうして作り出された観光文化は，「観光者の文化的脈絡と地元民の文化的脈絡とが出会うところで，各々独自の領域を形成しているものが，本来の文脈から離れて，一時的な観光の楽しみのために，ほんの少しだけ，売買される」[20]のである。

次に，観光にはどのような類型があり得るだろうか。前述した1974年のシンポジウムの所産である『観光・リゾート開発の人類学　ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応』を編集し

注9　1993年度の総輸出額の19.9%をコーヒー，10.7%を砂糖，7.4%をバナナが各々占めている。（ラテン・アメリカ協会編，外務省中南米局監修『中南米諸国便覧』ラテン・アメリカ協会，p.768。）

注10　観光がよく知られているものの発見だとすると，秘境を訪れるのは観光活動ではあり得ないことになる。前述したように，秘境とは「人跡のまれな，様子がよく知られていない土地」のことだからである。このように，「秘境ツアー」というものはそもそも矛盾した概念の結合なのである。

たスミスSmithによると，観光活動は「少数民族観光」,「文化観光」,「歴史観光」,「環境観光」,「レクリエーション観光」の五つの類型に大別できる[21]。少数民族観光は，風変わりでおもしろい習慣を持つ先住民族が住む地方を訪れる観光活動の形態である。文化観光は，我々の心に郷愁を誘うような家，織物，馬や牛車や鋤，手作りの工芸品など，現在では見られなくなった生活習慣の名残である絵のような美しさや豊かな地方性を求める観光活動の形態である。「歴史観光」は，過去の栄華を物語る歴史的建造物や遺跡などの史跡を巡る観光活動の形態である。「環境観光」は，学問的な関心の強い旅行者が，本当の異国を経験したり，人間と土地との関係を究明することを目的に，山や遠隔地を探訪する観光活動の形態である。最後に「レクリエーション観光」は，写真を見れば思わず行きたくなるようなスキー場，ゴルフ場，温泉，海岸などに赴き，くつろいで食事やスポーツや日光浴，湯治，あるいはギャンブルなどを楽しむ観光活動の形態である。

グァテマラは，『ナショナル・ジオグラフィック』誌の前編集長ウィルバー・ギャレットWilbur T. Garrettが提唱した「マヤの道La Ruta Maya」構想[22]の主要な構成国である。この構想は，マヤ地域の土地や人々に悪影響を及ぼさないように観光を統制しようとするものであり，マヤ地域の文化的・生態学的・考古学的重要性を強調し，その保護のための指針と資源を提供し，マヤ民族が生活状態を向上しつつ古代からの伝統文化を保持できるよう助成することを目的としており，グァテマラのみならず，メキシコ，ホンジュラス，ベリーズ，エル・サルバドルの５ヵ国が署名している[23]。持てる人的・物的資源を傷つけることなく観光を発展させようというわけで，言うならば「持続可能な観光」を目指しているのである[注11]。こうしてみると，先程の観光の五つの類型でグァテマラに該当するのは，主として少数民族観光と歴史観光になるであろう。そのことは，以下に見るような旅行社及びガイドブックのキャッチ・コピーからも窺われる。

「あなたに見せたい，地球の雄大さと繊細さを，人類の偉大さと愚かさを…」

「人間そして大地，甦る遺跡，遥かなる高みへ」

「グァテマラ・マヤ遺跡とインディヘナの市場」（以上西遊旅行）

「（略）多彩で，豊かな文明と，謎の遺跡群を，マヤ族で代表される中米と，（略）スペインにより，16世紀初め，征服された…。後，古来の，伝統・風俗・習慣を守りつつ美しくも哀しく，変質し続けている…。哀愁とロマンのただよう，インディオの世界。」（日本特殊旅行）

注11 他方，観光活動がその土地固有の伝統文化を破壊する恐れがあるという根強い批判があるのも事実である。しかし，観光活動が伝統を破壊するどころか，逆に再生・創造し，活性化する場合もあり得る。バリ島の事例を例にとってみよう。

バリ島を訪れる日本人観光客の数は少なくない。1993年には88万人を超えたと言われる。（吉田竹也「バリの伝統・観光・バリ研究―楽園の系譜学」，森部一・水谷俊夫・大岩碩編『変貌する社会文化人類学からのアプローチ―』ミネルヴァ書房，1997，p.102。）その日指すものは，大別すれば，「最後の楽園」の美しい自然と「神々と芸能の島」の伝統文化であろう。そして後者を代表するとみなされ，観光客にとって決して見逃せないのが，バロンとランダの儀礼劇とケチャであろう。しかし，その両者とも現在見られるような形になったのは今世紀前半以降であり，しかもそれに手を貸したのは当時バリ島に居住していたドイツ人画家ヴァルター・シュピースであった。（吉田竹也，前掲書，pp.112-5。及び山下晋司「《南》へ―バリ観光のなかの日本人―」，青木保・内堀基光・梶原景昭・小松和彦・清水昭俊・中林伸浩・福井勝義・船曳建夫・山下晋司編『岩波講座　文化人類学　第７巻　移動の民族誌』岩波書店，1996，p.35。）つまり，観光客がバリの伝統文化と認識し興じているこの両者は，実は観光を目的に創作された芸能なのであり，現在では新たな伝統として根付きつつあるのである。

いずれにせよ，民族文化の伝統の真正さに価値を見い出そうとする考え方に意味があるとは思えない。いかなる文化であれ，長い歴史の中で，内部的要因であれ外部的要因であれ，毫も変化を被らなかったものなどあり得ないからである。

「幻の鳥ケツァールがはばたく　マヤ遺跡の不思議と対話する　セントラル・アメリカを安全に愉快に自由に旅するためのアタックガイド」（『地球の歩き方　1999～2000版』）

事実，グァテマラ国内には，独自の伝統を保持する21のマヤ系先住民が居住し，固有の織物等で観光客の目を楽しませている。またユネスコの世界遺産に登録されたティカルTikal国立公園，キリグアQuirigua遺跡公園，アンティグア・グァテマラAntigua Guatemala[24]を始め，長い歴史の中でマヤ系の諸民族が残した遺跡や，植民地時代以降の史跡が豊富に存在し，古代文明に関心を持つ多くの人々を引き付けている。そして，冒頭に述べた事件に遭遇した日本人観光客も，マヤ民族が現在まで保持する伝統と祖先の残した偉大な歴史遺産に引かれてグァテマラを訪れ，惨禍に遭ったのである。

5．トドス・サントス・クチュマタンにおける日本人観光客死傷事件の概要

トドス・サントス・クチュマタンTodos Santos Cuchumatanは，グァテマラ北西部のウェウェテナンゴHuehuetenango県にあるこじんまりした町である[注12]。町は標高2450mほどのクチュマタン山脈の急峻な谷間に立地している。西へ下るとメキシコのチアパスへと至り，東や北に向かうと海抜約3500mの高所に達する。県都のウェウェテナンゴからは約40km，バスで2時間半ほどの距離である。気候は冷涼で，5月頃に雨季に入り，雨が毎日降る日が9月頃まで続く。町にはマヤの遺跡が二つある。一つはサン・マルティンSan Martinという集落にあり，もう一つは中心部にほど近い所にあるトゥフクマントゥシュンTujqmantuxunである。住民約2,2000人の大半は，マム・マヤ人である。彼らの間で日常的に使われる言葉はマム・マヤ語であるが，スペイン語も話せるいわゆるバイリンガルの人も少なくない。女性のほとんどが素晴しい織物を織ることで知られているが，それと同時に，自分の子供に対して極めて愛情深く，殊に幼児期には母親と子供は分かち難い程だとされている。土曜日にはメルカード（市場）が開かれ，観光客も含め大勢の人で賑わいを見せるが，町が1年で最も活気を帯びるのは，町の名前の元にもなっている11月1日の「全ての聖者の日Dia de Todos Santos」に催されるフィエスタ（祭）である。墓地で先祖の霊に参るこの日，伝統的な民族舞踊，様々な音楽などで町は賑わい，競馬でクライマックスを迎える。このようなのどかな町で，死者が出るような信じ難い暴動が起こったのである。

新聞報道（2000年5月1・2日付けの朝日，毎日，読売）によると，事件の経緯は次のようである。4月29日の午前10時頃，東京の旅行会社「西遊旅行」が企画した「秘境ツアー」に参加した日本人観光客約20名が，グァテマラ西部の町トドス・サントス・クチュマタンを訪れ，先住民の子供達に近づいたり写真を撮ったりしていたところ，子供をさらいに来たと勘違いした4人ほどが叫び声を上げた。それに呼応して周辺の人々数十人が暴徒化し，日本人観光客を取り囲んで石などを投げたり殴ったり暴行を加え始め，最終的には約500人もの住民がそれに加わった。この結果，日本人1人が死亡，2人が軽傷を負い，グァテマラ人運転手1人も死亡したというものである。

襲撃の理由としては，大別して二つの点が指摘されている。一つは子供の誘拐である。近年非合法の養子や臓器売買の目的で貧しい子供達がさらわれるという事件が発生している上，外国人が子供をさらいに来るという噂が以前から流れていたため，外国人に対して警戒感を強め

注12以降トドス・サントス・クチュマタンについての記述は，別の註がない限り，Eltringham, Peter, John Fisher and Iain Stewart, *The Maya World*, The Rough Guides, London, pp.364-6,1999 ; Brosnahan, Tom and Nancy Keller, *Guatemala, Belize & Yucatan : La Ruta Maya, 3rd Edition*, Lonely Planet,Hawthorn, pp.186-7,1997, ;Internet TODOS SANTOS CTUCHUMATAN., による。

ていたという。しかも，写真が子供の取り引きに利用される場合があり，子供達を中心に写真を撮っていた日本人観光客を子供をさらう一団の関係者と誤解したのである。

もう一つの理由は36年にも及んだ内戦による人心の荒廃である。グァテマラでは，長い内戦の間，先住民は軍による虐殺の対象になるなど政府から抑圧され続けた。そのため軍や警察，あるいは外部から来る人間に対して根強い不信感を持ち，自らを守るための自衛の意識が強くなっているのである。このような二つの土壌の上に，今回の悲劇的な事件は勃発したと推測されているのである。

6．事件の背景～その1・内戦～

現在グァテマラの先住民がおかれている政治的・経済的苦境は，スペイン人による征服活動に端を発する。1524年，ペドロ・デ・アルバラードPedro de Alvaradoはカクチケル・マヤ人の要請を受け，対立するキチェ・マヤ人を攻撃し，首都ウタトランUtatlanを焼き払った。その後，カクチケル・マヤ人の首都イシムチェIximcheを占領し，1524年7月25日にサンチャゴ・デ・カバジェロス・デ・グァテマラSantiago de Caballeros de Guatemalaを建設した[25]。その後征服活動は更に拡大し，最終的に現在のグァテマラ全土がスペインの植民地支配下に入るのである。1961年に始まった内戦自体は，基本的には共産主義のラテンアメリカ地域への浸透を危惧する米国の介入という，冷戦下のイデオロギーの対立に起因する政府軍と左翼ゲリラとの戦いであるが，この16世紀以来の抑圧[注13]を抜きにして，グァテマラ内戦の実態を理解することは出来ない[26]。この点については後で再び触れる。

内戦は1961年に始まり，1996年12月29日に最終和平協定「グァテマラにおける確固たる恒久的な和平協定」が政府とゲリラ組織の連合体であるグァテマラ民族革命連合（URNG）との間で調印されて終結した[注14]。この和平協定の重要分野は，包括的人権協定，武力紛争により影響を受けた人々の再定住協定，グァテマラ国民に対し苦痛を与えた人権侵害と暴力的行為に関する真相究明委員会（CEH）の設置協定，先住民族のアイデンティティと権利協定，社会経済的側面と農業問題に関する協定，文民協力の強化と民主体制における軍部の役割に関する協定，URNGの合法性への復帰のための基盤協定であるが，この内容を知らされていない国民が多い。また協定の履行期限は昨年の12月と定められているにもかかわらず，昨年8月に発表された国連グァテマラ監視団（MINUGUA）の検証報告によると，履行状況は40%程度であり，政府は履行期限を2003年にまで延長する見通しである[27]。しかし，この和平のプロセスの先行きは極めて不透明であり，予断を許さない。と言うのも，和平協定履行の基盤となり得る先住民族の権利確立，軍部の権限縮小，司法制度の改革等を主眼とした憲法改正案が，1999年の5月の国民投票で否決されたからである[28]。これは，決して国民の大多数が憲法改正を望まなかったことを意味するものではない。先述したように，国民の約40～60%が先住民であり，従ってスペイン語を解さない人々の割合も約40～60%にも達する同国において，スペイン語以外での情報は一切提供されなかったのに加えて，極右勢力や財界が憲法改正に反対する大々的なキャンペーンを実施した結果，投票率がわずか18.5%に終わったためである[29]。同年2月に発表されたCEHの報告書には，国による組織的な人権侵

[注13]現代のグァテマラ先住民の抑圧の状況については，リゴベルタ・メンチュ／農民統一委員会（CUC）『大地の叫び　グァテマラ先住民族の闘争』青木書店，1994，及び伊従直子『世界人権問題叢書　17　グアテマラ先住民の女たち』明石書店，1997，に詳しい。

[注14]内戦の経緯については，近藤敦子『グアテマラ現代史―苦悩するマヤの国―』彩流社，1996，に詳しい。また，内戦時に政府に抗して戦った人々の証言を中心にまとめた書として，ジェニファー・バーバリー『勇気の架け橋　グァテマラ内戦とマヤ先住民族・ゲリラの戦いの記録』解放出版社，1999，は極めて有益である。

害の実態や，その犠牲になった人々の救済など多くの勧告が記されていたが[30]，大統領は公式発表の場でのこの報告書の受け取りを拒否した上，和平協定との重複を理由に勧告の実施も退けた[31]。更に，前年の1998年4月26日，自らが代表を務める歴史的記憶の回復プロジェクト（REMHEI）の調査結果を大勢の人々の前で公表した2日後，ヘラルディGerardi司教が何者かに殺害されるという事件が起きている。識別できなくなるほど顔面をブロックで打ち砕かれるという，内戦時さながらの残酷な暗殺のやり方であった[32]。しかも，グァテマラにおける虐殺を世界に明らかにし，政府や軍部による人権侵害と戦い，その被害者の救済に尽力した司教の死を，司法当局は一般犯罪として扱い，当初は事件の第一発見者で司教と同じ宿舎に住む神父を逮捕しさえしたのである。これらのことからも，政府が和平の推進にいかに消極的であるかが見て取れる。

このように根強い守旧勢力によって意図的に低投票率に終わらされた国民投票であった上，その結果は改正に賛成が総有権者の7%，反対が9%と僅差であった。この数字からも，憲法改正の否決が決して国民の意思の反映でないことは明らかである。いずれにせよ，今後の和平のプロセスの行方は混沌としていると言わざるを得ない。

将来の見通しがつかないのと同じく，過去において行われた行為の清算も進捗していない。36年間に及ぶ内戦の間の被害は余りに悲惨であり甚大であった。国連の推計によると，626の村が破壊され，死者・行方不明者は20万人以上，国内避難民は150万人，国外難民は15万人以上に達する。しかも，表3からもわかるように，殺人，強制的失踪，拷問，婦女暴行等の人権侵害のほとんどが国家諸機関によるものであり，また犠牲者の83%が先住民なのである[33]。

先にも少し触れたが，内戦の根底には，単なるイデオロギー闘争という構図を超えた異民族に対する賤悪感があり，その結果内戦は政府軍対左翼ゲリラという枠組みを超えて，次第に先住民のジェノサイドという様相を呈し始めるのである。先住民がこの虐殺行為を「第二の征服」と呼ぶゆえんである。しかも，実際に虐殺の現場で実行したのが同じ先住民であっただけに，状況はますます複雑で，悲劇的なのである。と言うのも，軍の上層部の将校達はほとんど全てが士官学校や特別部隊の養成校出身のラディーノであるのに対し，兵士の多くは強制的に徴兵されたマヤ系先住民だったのである。兵士は訓練を通して，先住民としてのアイデンティティを捨て去ると同時に，殺戮行為の正当性をたたき込まれた。

表3　グァテマラにおける人権侵害の責任所在

（狐崎知己「中米諸国　武力紛争と社会変動」、グスタボ・アンドラーデ／堀坂浩太郎編『変動するラテンアメリカ社会「失われた10年を再考する』彩流社、1999、p.95、表6による。）

	人　数	比率(%)
政府軍	32,978	60.0
政府軍と自警団等の合同	10,602	19.3
自警団等	3,424	6.2
ゲリラ	5,117	9.3

軍と並んで先住民の虐殺行為に主導的役割を果たしたもう一つの存在がある。それは自警団（PAC）である。1981年に編成されたPACは，翌1982年法的に規定され，住民を恒常的に統制し，ゲリラとの戦いを有利に運ぶ目的で再編された。1980年代初頭，強制的に徴兵された先住民を中心とする農村の男性の大半（130万人）がPACに編成され，軍部の統制の下，徹底的なイデオロギー教育や軍事教練を受けた後，住民の殺害や軍への食糧供給や情報提供などの仕事を務めるようになった。彼らはマチェーテや棍棒を使ったり，ガソリンを用いたりして，相手に直接手を触れるという形で大量殺戮を行い続けたのである。自分の出身村落で殺戮行為を行うことも珍しくなかった[34]。今回の事件が発生したトドス・サントス・クチュマタンが属するウェウェテナンゴ県も，キチェ県に次いで被害が多かった地方なのである（表4）。

両県が軍の攻撃の標的になったのは，先住民の人口が他県に増して多かったことによる。

表4　グァテマラ内戦時(1962-1996)の県別人権侵害比率

(歴史的記憶の回復プロジェクト編『グァテマラ虐殺の記憶　真実と和解を求めて』岩波書店、2000、p.7、図1による。)

県　　名	人権侵害比率(%)
キチェ	46
ウェウェテナンゴ	16
アルタ・ベラパス	9
チマルテナンゴ	7
バハ・ベラパス	5
ペテン	3
サン・マルコス	3
グァテマラ	3

1970年代以降，軍事行動のみに依拠するのではなく，ゲリラ戦を支える広背地の拡大を図った左翼ゲリラは，これら先住民が多数住む高原部を拠点として活動を展開し始めた[35]。この新たな事態に対して軍はゲリラの後方支援を断つために，先住民が住む村落を襲撃し，村の抹消，ひいては先住民の抹殺という強行策を遂行し始めたのである[注15]。女性や子供を殺戮したのも，反乱分子の誕生や成長の芽を摘むためであり，民族根絶のためだったのである。そして，まさにこのトドス・サントス・クチュマタンも1981年から1982年までゲリラと政府軍に相次いで占拠され，その間に約200人が殺害され，多くの人々が町から逃れ，一時町の機能が麻痺しているのである[36]。

内戦時に吹き荒れたこのような虐殺行為の傷跡は，有形無形に人々の生活に暗い影を落としている。外部の人間はおろか，内部の人間ですら，一旦外部と結託したら自分達を虐げる側に回るということを経験した彼らの心の傷や猜疑心の根は，トラウマとして彼らの心深くに刻まれている。いつ誰が自分達を襲って迫害するかもわからないという実体験に基づく被害妄想と恐怖心，それに対する過剰防衛の意識が今回の事件を引き起こす一つの要因となったのは間違いなかろう。子供の誘拐という噂が以前から囁かれていたとしても，内戦時に負った彼らの深い心の傷がなければ，あのような激しい攻撃的行為に出ることは決してなかったであろう。

内戦終結後，あちこちで今回の事件にみられるようなリンチ事件が頻発しているという[37]。数百人もの人々が特定の人間を取り囲み，危害を加えるのである。手口も，内戦時代の虐殺と共通している。たとえば，今回のトドス・サントス・クチュマタンの事件でも，殺された日本人は石で顔面を砕かれているし，バスの運転手のグァテマラ人が体に火をつけられて焼き殺されているのだが，これはまさに内戦時に軍やPACが先住民を殺害するときに用いたやり方なのである。このあたりにも，内戦終結後も彼らがいまだに内戦時の悲惨な記憶から解放されていないことがわかる。国連の調査によると，軍や元PACが関与しているケースが大半だそうだが，内戦が長引いた地方ほどその頻度が高いという点に，終結後も内戦時の旧弊が改まっておらず，人心の荒廃が癒やされていないことが窺われる。

トドス・サントス・クチュマタンで日本人観光客が被った惨禍は，確かに痛ましい出来事であり，我々にとって信じがたいことであった。しかし，現地の人々にとっては，内戦以来，更に淵源をたどれば植民地時代以来の抑圧され迫害され続けた生活という土壌から生まれた，突発的ではあるが，日常性を帯びた出来事なのである。

7．事件の背景～その2・異人性～

最後に，この事件の背後にあるものとして，もう一つの要因について検討してみたい。それ

注15 この作戦を軍は「焦土作戦」と名付けた。「ゲリラは人民という大海を泳ぐ魚」というゲリラの戦略を逆手に取り，「魚を殺すために水を干上がらせる」戦略を用い，住民を大量に殺戮し，家畜を殺し，家々や田畑を焼き払ったのである。(孤崎知巳「中米諸国　武力紛争と社会変動」，グスタボ・アンドラーデ編『変動するラテンアメリカ社会「失われた10年」を再考する』彩流社，1999，p.93，及び，歴史的記憶の回復プロジェクト編『グアテマラ虐殺の記憶　真実と和解を求めて』岩波書店，2000，pp.134-5。)

は，日本人の「非日常的な異人」性の問題である。第5章で述べたように，トドス・サントス・クチュマタンは決して閉ざされた社会ではない。労働が目的で米国に渡る人々の数が増加しているし，それ以外の国へも機会があれば移民したいと考える人の数は少なくない[38]。また逆に，年に一度のフィエスタの日は勿論のこと，毎週土曜日のメルカードが立つ日には，多くの人々が集まって来る。近隣の町や村から来る同じマム・マヤ人に混じって，外国人観光客も訪れ，買物やメルカードの雰囲気に興じる。今回事件に遭遇することになった日本人観光客の一団も，そのような目的でこの町を訪れたのかも知れない。従って，トドス・サントス・クチュマタンの住人は，外部から来る人間に必ずしも不慣れではない。他の村や町から来る同じ民族集団に属する人々は，他者ではあっても異人ではないから，違和感なく接することが出来る。自分達とは人種的に明らかに異なる人々，すなわち欧米から来る白人とも日常的に接しており，彼らが自分達の文化とは異なるもの・珍しいものへの関心からやって来ていることを十分理解していると考えられるのである。

ただし，それは日頃目にすることが少なくなく，しかもそれでいて人種的には明瞭に自分達とは異なる人々（すなわち白人）に対しては，対応に慣れているということであろう。彼ら欧米の白人に関しては，異人であることは外見的にも一目瞭然であるが，日常接することが多く，彼らが自分達に金を落としてくれる観光客であることを，つまり自分達にとって利益になる存在であることを理解していると思われる。グァテマラでは，グリンゴgringoという言葉を聞くことが多い。これは，本来はグァテマラ人にとって異質の言語を話す人々のことを指すのであるが，実質的には米国人に代表される白人旅行者を，軽蔑的に指す際に使われることが多い。良い意味の言葉ではないが，別の見方をすればそれだけ欧米の白人旅行者が彼らにとってありふれていることの証左であろう。

ひるがえって，日本人の場合はどうであろうか。グァテマラを旅行すればわかることだが，日本人と出会うことは極めて少ない。欧米人にとってグァテマラが極めて魅力的で，それだけにありふれた観光地であるのと全く対照的に，日本人にとってまだまだterra incognitaなのである[注16]。彼らグァテマラ人にとっても，日頃目にすることのない我々日本人は未知に近い存在になる。筆者の経験では，首都のグァテマラ市では日本という国の知名度は高い。路上の人々と話しても，日本は世界一の経済大国だの技術大国だのと称賛され，面映ゆい気持ちになったことも一再ならずあった。街中が日本のメーカーの車や電化製品で溢れかえっていることで，そのことに納得も出来た。しかし，地方に行くと事情は異なる。首都でハポネスjapones（日本人）だった筆者は，チノchino（中国人）と呼ばれることが多くなった。メキシコにおいてチノと呼ばれることが最大級の侮辱とみなされていることを知っていた筆者が，タクシーに乗った際にその点について質したところ，グァテマラではその意味合いは全くないことを教えられた。要するに，アジア系の人々を一括してチノと呼んでいるようなのである。それだけ，先住民が大半を占める地方では日本という国，日本人という存在が浸透していないということなのである。

欧米人に人気の高いこのトドス・サントス・クチュマタンにおいても，状況はグァテマラ全体と同様である。トドス・サントス・クチュマタンの3軒のホテルに1993年から1996年9月にかけて宿泊した外国人観光客1589人の内訳を見るとは，上位6ヵ国がそれぞれ1位米国（314人，19.8%），2位オランダ（178人，11.2%），3位フランス（152人，9.6%），4位ドイツ（136人，8.6%），4位スペイン（136人，8.6%），6位カナダ（95人，6.0%）

注16 親日的で，日本についての情報がマスメディアを通じて豊富に流されるメキシコにおいても，地方に行くと日本人は好奇心の対象になることが多い。筆者も，観光地ではない地方の村落に立ち寄った際，集まって来る子供達の物珍しそうな視線にさらされ，居心地の悪い思いをしたことがしばしばある。

と欧米諸国が占め，日本は僅か29人と1.8%を占めるに過ぎない[39]。そうした日本人という馴染みの薄い存在が集団でやって来た時，訪れることが少ないだけに，この「非日常的異人」の来訪と，外国人が近いうちに子供を誘拐しに来るという噂が結びつけられやすかったのではないだろうか。前章で述べたような，内戦時の虐殺の蔓延で恐怖心に捕らわれ，ともすれば疑心暗鬼に陥りやすい心理状態の住民の中で，一部の日本人観光客がとった行動を子供の誘拐に関わるものと誤解し，扇動者の叫び声に触発されて，自らを守るために相手を襲うという過剰防衛の意識の結果，集団リンチ的行為に走るに至ったのではないかと思われるのである。同じ外国人観光客でも，普段姿を見ることが比較的多い「日常的異人」である欧米の白人であれば，彼らがとる行動パターンは見慣れたものであるだけに，過剰な反応を引き起こさなかったかも知れない。勿論これは単なる憶測に過ぎないが，日本人の先住民にとっての「非日常性」が，この場合は悪い方に作用した可能性は否定できないと思われる。

8．おわりに

グァテマラの自然は確かに美しい。開発が及んでいない山野は，まるで数十年前の日本に戻ったような懐かしささえ感じさせる。そこで暮らす人々の質朴さには心が安まるし，村ごとに異なる色鮮やかな民族衣装には目を見張らせられる。桃源郷に踏み入ったような心地，と言っても過言ではない。そして，ジャングルの中に眠る神秘的なピラミッド型神殿の群れは，どうしてこのような困難な場所に高度な都市を築くことが出来たのかと，やむことのない好奇心を掻き立てる。壮大な遺跡があちこちにあり，美しい自然に恵まれ，そこで昔ながらの伝統的を生活を営む先住民が暮らすグァテマラは，確かに旅行者にとって魅力的な場所なのである。このような魅力に引き寄せられて，これまでグァテマラには多くの観光客が訪れてきたし，今後もこの傾向は続くであろう。

しかし，表面的には平和に見える先住民の，哀しくも悲惨な歴史を直視しなくては，グァテマラの本当の姿は見えてこない。グァテマラ政府観光局が発行するポスターやパンフレットに溢れている，偉大なマヤ文明の遺跡や美しい民族衣装で着飾った先住民の写真の欺瞞性に騙されてはならない。彼ら先住民は，政府によって観光客を引き寄せるための宣伝材料として使われると同時に，ジェノサイドの対象として虐殺されていたのである。観光客が目にすることになる先住民の村々は，つい数年前まで虐殺の嵐が吹き荒れた戦場だったかも知れないし，色鮮やかなコルテcorte（巻きスカート）をつけた先住民女性は，家族の全てを虐殺によって失い，いまだにかつての悪夢のような日々の記憶に苛まれている女性かも知れないのである。

ジェノサイドによって多くの人が殺されたグァテマラのマヤ民族は，それだけに誰よりも平和を希求する人々である。新聞報道によると，事件に荷担した先住民の中には，自分達の行為が全く過ちだったと知ると，泣いて悔やむ人もいたという。何の罪もない人を殺害するというかつて自分達が受けた行為を，今度は自分達が行うという形で，悲劇が再生されたのである。しかも事件の首謀者を逮捕した警察は，彼らを迫害し続けた国家機関の一つである。必ずしも悪意から発したものではなく，内戦時に大量虐殺の対象になったために負ったトラウマがなければ決して引き起こさなかったであろう行為によって，再び国家機関から害を受けるのであれば，悲劇としか言いようがない。そして，今回の事件を通じて，内戦終結後の最大の援助国である日本[40]の国民から危険な民族という誤った烙印を押されるとしたら，彼らにとっては二重の悲劇である。

第4章で，観光とは「異郷において，よく知られているものを，ほんの少し，一時的な楽しみとして，売買すること」という定義を紹介した。グァテマラは，日本人にとって「異郷」であるし，マヤ遺跡等を通じて「よく知られて」もいるが，「一時的な楽しみとして，売買する」には余りにも重い記憶を引きずっている国なの

である。

観光の場は「異郷」である。すなわち，観光とは日常的生活が営まれる場所とは切り離された異空間で行われる活動なのである。だからこそ，観光客は自分達の平常の生活にないものを求めがちである。よりもの珍しいもの，より馴染みのないものほど，観光においては価値があるのである。しかし，観光地に住んでいる者にとって，観光は日常的活動である。従って，観光地は，ゲストの非日常とホストの日常が交差する場所であると言える。観光客がより多く訪れる，言わば観光度が高い場所ほど，ゲストとホストの間の緊張度は低い。しかし，その緊張度は，一定不変のものではない。内的・外的要因によって，変化する可能性を有している。時と場合によっては，何らかの要因が働いて，この緊張が飽和状態を超えて突発的にはじけないとも限らない。トドス・サントス・クチュマタンにおける今回の事件は，それが最悪の形で現出した一例であろう。

観光の場では，ホストもゲストも「よく知られているものを，ほんの少し，一時的な楽しみとして，売買すること」を期待している。しかし，ほんの些細なことが原因で齟齬をきたし，両者の関係が思惑通りに運ばないこともあり得る。と言うのも，観光はホストとゲストの間の異文化が出会うことでもあるからである。それだけに，両者の間にはお互いにとって利益を得る期待があると同時に，摩擦や衝突を常に潜在的にはらんでいるのである。

引用文献

(1)山下晋司「南へ！北へ！―移動の民族誌―」，青木保・内堀基光・梶原景昭・小松和彦・清水昭俊・中林伸浩・福井勝義・船曳建夫・山下晋司編『岩波講座　文化人類学　第７巻　移動の民族誌』岩波書店，1996，p.6。

(2)ゼロン・ヌーネッツ「人類学から展望する観光活動の研究」，バレーン・L・スミス編『観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応研究―』勁草書房，1991，p.367。

(3)田中優子「サンティアゴ・デ・コンポステラ　二千年の過去に出会う旅」，『週間朝日百科『世界の歴史』別冊　旅の世界史４信仰の道』朝日新聞社，1991，pp,28-33。

(4)関一敏「近代の聖地ルルド　少女の神秘体験が生んだ巡礼地」，『週間朝日百科『世界の歴史』別冊　旅の世界史４信仰の道朝日新聞社』，1991，pp,34-7。

(5)山下晋司「観光人類学案内―《文化》への新しいアプローチ―」，山下晋司編『観光人類学』新曜社，1996，p.4。

(6)石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編『文化人類学事典』弘文堂，1986。

(7)山下晋司「この本を手にしたあなたへ」，山下晋司編『観光人類学』新曜社，1996，p.iii。

(8)橋本和也『観光人類学の戦略　文化の売り方・売られ方』世界思想社，1999，p.8・290。

(9)ジェームズ・レット「人類学から展望する観光活動の研究　エピローグ」，バレーン・L・スミス編『観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応研究―』勁草書房，1991，p.382。

(10)山下晋司「南へ！北へ！―移動の民族誌―」，pp.3-6。

(11)総理府編『平成３年版観光白書』大蔵省印刷局，1991，p.38。

(12)総理府編『平成４年版観光白書』大蔵省印刷局，1992，p.50。

(13)総務庁統計局編『日本の統計　1999』大蔵省印刷局，p.28，1999。

(14)総理府編『平成11年版観光白書』大蔵省印刷局，1999，p.3及びpp.34-6。

(15)総理府編『平成３年版観光白書』，p.39。

(16)大貫良夫・落合一秦・国本伊代・恒川恵市・福嶋正徳・松下洋監修『新訂増補ラテン・アメリカを知る事典』平凡社，1999，p.551。

(17)バレーン・L・スミス「序論」，バレーン・L・スミス編『観光・リゾート開発の人類学　ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房，1991，p.9。

(18)ゼロン・ヌーネッツ，前掲書，p.370。

(19)ピアーズ・ブレンドン『トマス・クック物語　近代ツーリズムの創始者』中央公論社，1995，p.117。

(20)橋本和也，前掲書，p.55。

(21)バレーン・L・スミス，前掲書，pp.6-8。

(22)Garrett, Wilbur T., *La Ruta Maya*, National Geographic, vol.176, no.4, pp.424-505.

(23)Brosnahan, Tom and Nancy Keller, *Guatemala, Belize & Yucatan : La Ruta Maya, 3rd Edition,*

Lonely Planet, 1997, Hawthorn, pp.13-4.

(24)ユネスコ世界遺産センター監修『ユネスコ世界遺産・2・中央・南アメリカ』講談社，1997，pp.40-59。

(25)増田義郎「ヨーロッパ人の侵入」，増田義郎・山田睦男編『新版世界各国史 25 ラテン・アメリカ史 I メキシコ・中央アメリカ・カリブ海』山川出版社，1999，p.70。

(26)歴史的記憶の回復プロジェクト編『グアテマラ虐殺の記憶　真実と和解を求めて』岩波書店，2000，pp.15-6。

(27)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書，pp.7-9。

(28)孤崎知巳「グアテマラ合意」，大貫良夫・落合一秦・国本伊代・恒川恵市・福嶋正徳・松下洋監修『新訂増補ラテン・アメリカを知る事典』平凡社，1999，p.528。

(29)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書，p.30。

(30)孤崎知巳「グアテマラ合意」，大貫良夫・落合一秦・国本伊代・恒川恵市・福嶋正徳・松下洋監修『新訂増補ラテン・アメリカを知る事典』平凡社，1999，p.528。

(31)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書，p.30。

(32)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書，pp.10-1。

(33)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書p.5。

(34)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書，pp.16-7。

(35)飯島みどり「「国家」に変容を迫るインディオたち」，歴史学研究会編『南北アメリカの500年　第5巻 統合と自立』青木書店，1993，pp.225-6。

(36)池田光穂「商品としての民族・文化・定期市—グアテマラ西部高地における民族観光—」，『市場史研究』第17号，p.94。

(37)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書，pp.30-1。

(38)池田光穂，前掲書，pp.96-8。

(39)池田光穂，前掲書，pp.95。

(40)歴史的記憶の回復プロジェクト編，前掲書，p.31。